



はしもと えいじ
橋本 瑛司 さん

京都生まれの33歳。鴨川湯の二男として生まれた。大学で経済を学んだ後、商社に就職したが、8年後に母が倒れて退社。父とともに鴨川湯を継承、経営する。一児の父。瑛司さんは、女性客に配慮して番台に座らない。最近始めた日曜8時からの朝風呂で、賀茂川のランニング客が増えた。日替わりの薬湯は瑛司さんのアイデア。

経営は楽ではありませんが、
常連客の日常を大切にしたい母の思いを
継いでいきたい。



欄間や木製の脱衣ロッカーなど、昭和テイストが残る鴨川湯。ずっと残していきたい物ばかりである。

縁の下の カモチ

人情味あふれる町の銭湯が、
今も京都の人の暮らしを支える

京都には昭和テイストの銭湯がまだ残る。風呂がない家や、伝統産業の住み込みの職人らにとって必需の施設だった。銭湯で地域の人は交流し子どもたちは生活ルールを学んだ。最盛期の昭和40年代には府内で約600軒あったが、家庭風呂が普及した現在、約130軒まで減少している。北大路にある鴨川湯もそんな町の銭湯のひとつ。今も常連客を中心に、夫婦や子連れ客、湯上りのおしゃべりを楽しみに足を運ぶ人も多く、暮らしに密着した存在だ。

「銭湯をほぼ一人で切り盛りしていた母が急逝し、『勢い』で跡を継ぎました」と語る橋本瑛司さんが実家の鴨川湯を継いで間もなく3年になる。祖父母と母が昭和40年代から鴨川湯を経営、近隣住民の日常を支えてきた。瑛司さんは幼い頃から鴨川湯でお客さんにかわいがられ、時に叱られて育った。母を失い廃業という選択肢もあったが、「お母さんは3人の子育てをしながら銭湯を切り盛りし、本当に働き者だった」となじみ客が回想するように、お客さんの日常を支えてきた母の姿が頭を離れなかつた。母が大切にしていたものを守りたい思いが、会社を辞めてまで跡を継ぐ原動力となった。

祖父母の代から通う女性は「定年退職した今、ここの一番風呂が最高の贅沢であり、自分への『褒美』と、毎日午後3時の暖簾がけを店先で待つ。地域の人とともに生きる銭湯が、京都には健在だ。

私もカモチです

地域に暮らす人たちの日常を支える銭湯と同様、三洋化成工業も、暮らしや産業の様々な分野を支えています。



三洋化成工業株式会社

京都市東山区一橋野本町11-1

最寄りバス停は「泉涌寺通」



「はたらき」を化学する。
"Performance" Through Chemistry